

ワークショップ「震災」と俳句」報告

加 島 正 浩

他の〈文学〉ジャンルにおいても有益な示唆を与えると考える。

本ワークショップ「震災」と俳句」は、二〇二〇年八月八日（土）にオンライン上で開催された第六一回原爆文学研究会にて行われた。本稿は、ワークショップの趣旨や当日の内容を記録し、今後の課題を記述するものである。まず研究会の案内に掲載した本企画の趣意文を引用する。

本ワークショップでは、これまでの東日本大震災と〈文学〉を主題とした議論を視野に收めつつ、俳句を題材に取りたい。

震災表象を考える際に、各領域でしばしば問題となる〈当事者〉性が、俳句においては、テレビ映像を見ることで詠まれたテレビ俳句の是非や、「励ましの一句」として被災地の〈外側〉で詠まれた俳句の是非として鋭く問題化されてきた。（内観）

や〈写生〉を句作の基本とする立場からは、被災地に訪れることなしに句を詠むのは適切ではない、あるいは訪れたとしても震災を詠むことは望ましくないとする意見もある。俳句を題材に、震災表象ならばに〈当事者性〉を考察することは、

これまでの句を踏まえる俳句という文芸においては、伝統的にどう〈震災〉が詠まってきたかを理解しておくことが必要になる。たとえば、テレビ俳句においては想望俳句の句やその議論を、福島忌などの新季語の問題は〈震災忌〉や原爆忌を踏まえる必要があるだろう。東日本大震災をそれ以前の文化伝統と接続することで、俳句における震災表象の考察を深めることも目的とする。

今回は、関東大震災、原爆、東日本大震災という三つの事例を取り上げる。それぞれの事例における個別の問題を捉えると同時に、何が連続して引き継がれる課題であるのかを浮き彫りにし、震災表象における〈文学〉の問題を考える一助としたい。

企画者の意図を加えて説明するならば、本ワークショップは「戦後七〇年連続ワーキング・ショップIV」として二〇一四年二月に開催された野坂昭雄氏の企画「カタストロフィと〈詩〉」を踏まえて、立案された。『原爆文学研究』一四号に掲載された野坂氏の趣旨説明「カタストロフィ後に〈詩〉を書くということ」を参照すると、そこでは「カタストロフィと〈詩〉」が切り結ぶ関係、あるいはそこで用いられる言葉や形式の記述可能性を探る試みが、企画意図のひとつとしてなされていたことがわかる。

本企画も、野坂氏が意図した方向性を共有し、カタストロフィと言語表現がどのように切り結ぶことができるのかを考察の俎上にあげると同時に、〈俳句〉という文芸ジャンルの歴史性を問題化しようと試みた。そこで〈俳句〉を問題化する意図はふたつあった。ひとつは、震災表象の領域でしばしば問題となる「当事者」性の問題が最も先鋭的に問われているジャンルのひとつが、〈俳句〉という文芸であり、俳句における震災詠を議論することで、他の言語表現における「当事者」性の問題を考察するうえでの視点を提供することができると考えたからだ（小説における「当事者」性の議論は、拙論『非当事者』にできること——東日本大震災以後の文学にみる被災地と東京の関係）『JunCure』八号を参照いただきたい）。そしてもうひとつの意図は、ひとつの震災を詠む際にも、伝統的にどう「震災」が詠まってきたかを理解しておくことが必要になる〈俳句〉という文芸においては、東日本大震災を詠む以前にも、〈震災〉を詠んできた蓄積があり、東日本大震災をどう詠むか、言語化するかを考えるうえでの参考項を与えてくれると考えたためである。

もちろん〈俳句〉の歴史性を問題にすることは、〈俳句〉における東日本大震災以後の震災詠を考える作業としても有益である。たとえば、東日本大震災以後、〈ラクシマ／福島忌〉〈原発忌〉など〈季語〉としてたびたび用いられたり、あるいは〈無季〉で詠むことがふさわしい場面があるのではないかという議論がなされたりと、俳壇において議論がつく論点に〈季語〉の問題がある。そこに関東大震災を（基本的には）示す季語の〈震災忌〉や、八月六日・九日を示す〈原爆忌〉を用いて詠まれた句の考察を加えることは、俳句が理不尽な大量死にどのように向き合いつづけてきたかを示し、〈俳句〉というジャンルが要請する〈季語〉による震災表象の多様さと深さを明らかにすることになる。

他にも東日本大震災以後の震災詠においては、被災者以外は〈震災〉を詠むべきではない、あるいはテレビの映像を基に句作を行うべきではないという〈写生〉を句作の基本とする立場からの問題提起などもあった。しかし、〈震災を詠む〉ことは直ちに〈震災を写生〉することを意味するわけではなく、直接には震災に触れないという詠み方も含め、多様な詠み方があり得る。その震災詠の多様さを示す発表が、藤田祐史氏による久保田万太郎の関東大震災における〈震災〉詠の報告であった。個別の詳しい報告はそれぞれの論考をご覧いただきたいが、藤田氏は久保田が〈ライクション〉性を導入することで、〈震災〉詠の幅を広げたことを久保田の仕事を丁寧に追いかながら示された。また樺本由貴氏は、一九五五年刊行の『広島』・『長崎』という二つの句集における〈原爆忌〉が用いられた句を丁寧に分類・分析することで〈原爆忌〉という季語による句作の広がりを示された。加島の報告では、御中虫『関搖れる』

を扱い、「閑搖れる」という疑似季語を用いることで、被災してない立場から被災者／震災へとつながろうとする詠み方が試みられていたことを示した。

コメントナーの中原豊氏からは、こちらも詳しくは中原氏の論考をご覧いただきたいが、詠み手は誰に向かって詠んでいるのかという震災詠における読者の問題、「季語」がもつ「時間」性の問題や震災を詠んだ句が読み継がれていく可能性など発表者三人に共通する論点を示していた。会場からも多岐にわたる指摘や論点が提出され、大変活気のあるワークショップとなつた。個々の発表に関する指摘は、それぞれの報告に反映されているため、ここでは企画全体に関わる点について報告を申し上げる。

今回の企画の達成としては、「忌日季語」の多様性を示せたこと、また震災詠における「季語」が、季語の創出や無季で詠む試みも含め、表象不可能なカタストロフィを言語化し、そこに迫ろうとする試みの産物である可能性を示せたことであろう。藤田氏は「震災忌」という「季語」の定着を、俳句が「震災」を「季」として受容したこと意味するとし、「震災忌」は災厄に対する言葉の探求がなされる、一種の「場」としても機能しているのではないかと提言された。樺本氏は、一九五五年の「原爆忌」を用いた俳句を整理・分析され、「原爆忌」には、死者を悼む以外にも五〇年代の社会運動で共有された想像力の多様な反映がみられることが報告された。「震災忌」という「場」を用いることで「震災」の詠み方が新たに生まれること、また同時代の社会運動の想像力を受け止める季語として「原爆忌」という季語があり、そこから多様な主張と結びつく句作が行われていたことからは、「○○忌」

という季語の意味が固定的なものではなく、句作によって、また社会の想像力の変化によって、変動していくことが示されている。「忌日季語」はそれを用いることで、かつてのカタストロフィの記憶を想起させるが、藤田氏の報告のようにそれを「場」とみなすことと捉え、日常を詠む「有季句」ではなく「無季句」を選択し、震災というカタストロフィに迫ろうとする試みであつたといえ。御中虫日本大震災を、季節のサイクル（＝日常）の外側で起つた出来事と捉え、日常を詠む「有季句」ではなく「無季句」を選択し、震災というカタストロフィに迫ろうとする試みであつたといえ。御中虫の「閑搖れる」も「閑搖れる」という代替季語を創出し、それを「震災」の季語とみなすことで、全体を捉えることできないカタストロフィを代替しようとする試みであつたといえるだろう。

いずれにせよ俳句においては、「震災詠」といえども「季語」が重要な役割を果たし、「無季」が機能するのも、「有季」で詠むのが基本という前提が強くあるためであろう。「季語」あるいは「忌日季語」によつて、俳句はカタストロフィへの接近を試みていると総括することができるだろう。

しかしその点をより明確にするためには、今回のワークショップでは「フクシマ／福島忌」「原発忌」の問題も取り扱うべきであつた。議論の際に、「連続して引き継がれる課題」を考察すると趣意文にあるが、三者の発表の連続性がわからにくいくらいという指摘を頂戴したが、その点は加島が「フクシマ／福島忌」「原発忌」の問題を扱えなかつたことに一因がある。俳壇の中心人物で最初に「フクシマ忌」を用いたのは、角川春樹『白い戦場』（文學の森、二〇一一年一〇月）であり、東日本大震災の「忌日季語化」の早さや被災者でない角

川がそれを用いたことへの批判もあった。しかしその後、福島県いわき市の俳人、結城良一を中心に行はれて、浜通り俳句協会誌『浜通り』などにも〈フクシマ／福島忌〉はしばしば登場し、被災者も使用し始めたことから、問題が複雑化し、単純に否定も肯定もできないのが、現状かと考える。また『原発忌』については、山崎十生の『原発忌』（破殻出版、二〇一三年二月）など考察すべき句集も存在しているが、『原発忌』を東日本大震災以後の「忌日季語」と捉えるのが適切であるのか、原発が稼働して以降の、たとえば樋口健二『闇に消される原発被曝者』（三二書房、一九八一年一月）が示すような原発被曝者も『原発忌』に含めて考えるべきではないのか、また「いつ」を『原発忌』と定めるべきなのか（東海村に建設された動力試験炉が初発電を行った日を指すのか、はたまた初めて核実験が行われたトリニティ実験の日を指すのか……などこちらも、考察すべき課題が多い。今回のワークショップのなかで扱えなかつたのは、加島の能力不足ゆえであるが、今後の私の課題として引き受け、考察してまいりたい。

また連続性に関係するものとしては、なぜ「関東大震災」と「原爆」と「東日本大震災」という三種が選ばれたのか。「東日本大震災」の参照点とするならば、阪神淡路大震災も考察に含めるべきではないのか、という指摘も賜つた。この点についても、阪神淡路大震災で被災した経験を詠み、東日本大震災以後に『黙礼』（沖積舎、二〇一二年八月）、『海の音』（朔出版、二〇一七年九月）などの句集を発表した友岡子郷など、阪神淡路大震災との連続性を考察するうえで重要な俳人は念頭にあつたものの、今回は扱うことができなかつた。こちらも今後の報告課題としたい。

他にも戦争を〈無季〉で詠んだ山口誓子と〈無季〉で詠まれた震災詠の比較の視点や、中野敏男『詩歌と戦争』（ＮＨＫ出版、二〇一二年五月）が指摘するような、関東大震災後に生じた戦争協力詩の流行を踏まえて、今回の震災詠を考察する視点などの指摘も頂戴し、戦時下の俳句を参照点として扱うことの重要性も議論のなかで提起された。

そして今回のワークショップで、他の〈文学〉ジャンル、特に詩歌との比較を企図するのであれば、考えるべき課題として「私」性の問題があるのでないかという問題提起もいただいた。詩においては、たとえば稻川方人、瀬尾育生、守中高明の鼎談において、イラク戦争やイラク日本人青年殺害事件が起こつた際に「世界史的な出来事をプライベートな心理に導き入れて、そこで生理的に反応してしまう」という感受性のあり方を問題視し、「われわれがしなければいけないのは、日本人の人質の惨殺という出来事をプライベートな回路に引き込むのではなくて、まさしくパブリックな場面に向けて、あえて言いますが、作品化して投げ込んでいかなければいけない」（稻川方人・瀬尾育生『詩的問伐——対話2002—2009』（思潮社、二〇〇九年一〇月）、二四五頁）という提起がなされた。それと比したとき、確かに俳句における震災直後の震災詠は、震災に直面した「私」の心理を詠むものが多いといえる。たとえば関悦史は、照井翠の震災句を中心に、以下のようにドライに総括している。

安全圏からの詠嘆か、被災のただなかで一本の糸をつかむよう

化または審美化によつて災厄を懷柔しようとするものが多かつた。(中略)震災詠のみから成る句集『龍宮』を刊行した照井翠はその最も痛ましい例で、『なぜ生きるこれだけ神に叱られて』『毛布被り孤島となりて泣きにけり』『芋殻焚くくるしてゆるしてゆるしてと』といった情緒化にすらいたらない手放しの嘆きや、『死にもせぬ芭の海に入りにけり』『喉に当てし水柱を握る力かな』に見られる希死念慮など、ひたすら荒れ狂う自分の心を鎮めかねており、津波後の風景すら句集からほとんど見えてこないほどだ(関悦史「数学に問うブルトニウムを詠むべきかと」初出『現代詩手帖』二〇一三年五月号、引用『俳句という他界』(邑書林、二〇一七年三月、一七五頁))

このような闇の指摘のために、照井の句の価値が損なわれるとは全く思わないが、確かに「私」の心情を詠む以外の試みを検討していく必要もあるだろう。たとえば鶴田智哉『凧と円柱』(ふらんす堂、二〇一四年九月)は、震災の「痕跡」を詠み、出来事をめぐる「以前／以後」の枠組み自体を捉え返すような試みをフイクション性を含むような句作によつても行つており、鶴田のような仕事を震災詠の可能性を拓げるものとして、分析していく必要はあるだろう。当日の議論のなかでは、俳句と短歌におけるフイクション性(虚構問題)も議題にあがり、寺山修司から近年短歌界で問題となつた石井僚一「父親のような雨に打たれて」(第五七回短歌研究新人賞)までが議論となり、一人称の文芸ともいわれる俳句や短歌がフイクションをどのように扱い、またそれにより〈震災〉を詠むことができるのかという点も、今後検討すべき課題のひとつとして浮上した。

以上ワークショッピングの企画趣旨に関するだけでも、これだけ多くのご指摘をいただき、今後の課題をいただくことができた。当日ご参加いただき、議論を盛り上げてくださったみなさまに、深くお礼を申し上げる。